被災地派遣レポート＜第１０回＞

水道局多摩水道改革推進本部多摩給水管理事務所　相原　欣也さん

■福島の街並

福島駅を降り派遣先である福島県自治会館に向かう街並みを歩いてみると、震災の影響を感じさせない風景であった。しかし、震災直後から現地駐在をしている都職員から当時のライフラインを始めとする混乱や、今もなお土日関係なく開催される会議や報告会への招集を聞くとともに、ニュース等で発信されていた福島第一原子力発電所の事故に伴う報道現場を間近で見て、市内を歩いて感じた平穏な風景は幻想であったと痛感した。

（福島県自治会館）

（報道関係者詰所・報道フロア）

■派遣者の業務

今回の派遣の仕事は、福島第一原発事故に伴い警戒区域、緊急時避難準備区域、計画的避難区域に該当する市町村に住んでいた居住者の避難地域の調査が目的である。東京都においても２０００年の三宅島噴火に伴い全島民の避難を経験しているが、今回の事故による避難者はそれと比べようもない人数である。このため１０万人のデータ整理を３人で行うのだから、手分けして行わなければ一週間で終わらせる事が出来ない量であった。

先ずは提出された住所を市町村コードに合致するデータに振り分けたのだが、市町村合併により名前が変わったもの、単なる誤字脱字によるもの、施設名しか書いていないもの、それらを個々に調べ上げ入力するため、思っていたよりも手間がかかる作業であった。

私たちの机は会議室内に用意されていたのだが、同じフロアでは避難区域への立ち入りに必要な許可書発行の電話相談を受けていたため、電話越しではあるがこの事故による被害の深刻さを実感させられた。

１０万人にも上るデータ整理のため派遣期間内に終わるかと思われた作業であるが、途中効率的に仕分けを進める事により、３日目には全ての市町村別の振り分けを終わらせる事が出来たと安心したところに、「思っていたよりも順調そうなので、申し訳ないのだがアンケート調査の整理も行ってもらえませんか！？」との追加注文が発生し再びデータ入力の業務に追われた。

最終日に「予定していた作業以外のものもやって貰えて助かりました」と言われたときに、私たちの仕事も少しはお役に立てたのだと思いました。

一週間という短い間でしたが今回の行政支援で行った作業が、今後の被災者への継続的な支援につながるデータベース作りの元になれば何よりです。